朱熹『論語集注』全訳注を刊行して

土田 健次郎

本年（二〇一五年）に筆者の『論語集注』全訳注の刊行が完了した。全四冊。出版社は平凡社で、東洋文庫に収められている。『論語集注』は言うまでもなく南宋の朱熹の著作であり、魏の何晏の『論語集解』が古注と言われるのに対し新注と称され、近世東アジアにおいて圧倒的な権威を持った。いやしくもこの地域で教養人をもって任ずる者は必ず本書を読んだ経験を持つ。注釈書が古典となった典型であると言ってもよい。ところがかくも重要な書物でありながら、全訳注として決定版と言えるものは無かった。筆者が知っている日本語の現代語訳は二点ある。しかしともに原語をかなりそのまま使用するという性格のもので、一点は書き下し文のテニヲハを現代語風になおした体のもの、もう一点は誠実な仕事ではあるものの、二点とも今からすれば翻訳としてはこなれたものとは言い難い。なお本稿では、先行書や関係書の具体的書名は、既に本訳注第一巻の「訳注者まえがき」に記しているし、紙数制限の関係もあるの

で、一つ一つを挙げることはしない。
本訳注の構成はこのようになってい

る。原文、書き下し文、現代語訳、注を記したうえで、その後

の原文、書き下し文、現代語訳、注を記したうえで、その後

「補説」として江戸時代の伊藤仁齋の『論語古義』と荻生徂徠の『論語徴』の解釈の要旨を付している。
まず原文について言うと、今までは呉志忠校刊本が使われることが多かったが、今回は『朱子全書』（上海古籍出版社、安徽教育出版社）所収の現存最古とされる宋版を底本にし、いくつかのテキストをもとに校勘を試みた。ただ実際に字句の異同を記したのはごく一部の目立つ箇所である。従来の諸研究によると朱熹は四十八歳に一応の成稿を仕上げたと推測されるが、それはまだ意に満たないものであった。ところがそれが勝手に刊行され出回ってしまい、朱熹を嘆かせることになった。朱熹は結局晩年まで『論語集注』に手を入れ続けたのであって、その修正過程は『朱子語類』や『朱子文集』をはじめとする朱熹の他の著作に見られる引用から窺えるが、現行の諸テキストは、助字の差異の類は別として、意外なほど字句の異同は少ない。修正を加えていく過程で作成された各ヴァージョンがそのまま残っているのではなく、おそらく晩年近くのテキストが字句の異同を多少持ちながら今に至っているのであるうか。ただ『論語集注』は朱熹が一字も増減できないと豪語した書物のわりには、『朱子語類』一九・第五九条、出典の誤りや内容的に不統一の箇所があり、それは注に記しておいた。これはテキスト自体の問題なのかどうかは不明である。また朱熹は主語に付す字が「猶」、「者」、「謂」、何も付さない場合の差にまで神経を使った

と称しているが(同・第六四条)、そこまでのニュアンスを取り切れなかった憾みが残る。

次に書き下し文であるが、東洋文庫の方針に従い、現代仮名遣にしたが、筆者は歴史的仮名遣にしたかったのが本音である。書き下し文は日本語の古典語だからである。なお訓読の方式は固めのものであるが、現代語訳を付す場合はその方が意味があると思っっている。こなしすぎた書き下し文はかえって読みにくいし、中途半端な現代語訳のようなものになりがちで、現代語訳を付す意味も減退する。

それに対して現代語訳の方は、なるべくこなれたものにしたかった。翻訳というものは原文を見なくても意味が取れるものでなくてはならないが、それがうまくいったかどうかは自信が無い。先行する現代語訳については先に触れたが、それ以外に朱熹の注をもとに『論語』本文を現代語訳したのも筆者の知る限り二点あり、そのうち一点はごく一部分だが注の訳も添えている。また現代中国語訳もあるが、母語だけに原書の語をそのまま使用し訳していないところが少なからずあり、勝手な話ながらもどかしく感ぜられる。結局最も優れた参考書は、逐字的な翻訳ではなく要旨のみを書いたのだが、江戸時代の中村惕齋の『論語示蒙句解』であろうか。

注釈について言うと、近代以前の東アジア各地で『論語集注』の注は大量に作られたが、その多くは朱熹と道学関係者の語を集めることによって、そこにある思想内容を補足し敷衍

するという性格のものであった。南宋から元にかけて作られた『通志堂経解』に収められているような未疏の類がそれであり、明の胡宏等の奉勅撰『論語大全』に流れ込んでいくが、それ以後も同種の書物は枚挙に暇が無い。一方出典を調べ上げて注すという作業をしたものは意外なほど無い。朝鮮王朝あたりにはいかにも作られていそうなので探してはみたが見つからなかった。典拠や関連資料をあげている注釈書は日中にわたり何冊かあるのだが、重要なものも抜けていてとても網羅的なものとは言えない。もともと古人にとっては読者が通曉しているはずの書物を逐一出典として明記することなど今更の仕事と思えたのかもしれない。ともかくも必須なものがまだ漏れているからしりである。

『論語集注』の注は書こうと思えばいくらでも長くできる。朱熹は先人の語を引用する場合、より意味を取りやすくしたり自分の理解に近づけるために原典を大胆に修改することが多く、そのことは朱熹自身が述べている(同・第六三条、第六四條)。原典と引用箇所を具体的に記すと数倍の量になり、とても予定の巻数に入るものではない。またあまりの煩瑣に読者もかえって理解の筋道が辿りづらくなるので、この類は省略した。その他、同じく朱熹が編集した道学の『論語』解釈の資料集である『論語精義』などに引かれているものと人名が一致しなかったり、明らかに他人の言葉なのに自分の言葉のように

しているのがあつたりと問題は尽きないのであるが、それらについて必要最小限に止めた。『論語集注』は先人の注を集めたと称しながら、実は朱熹はその引用した原文に手を入れまくっているのである。

『論語集注』は道学の『論語』解釈を朱熹が選択的に集めた書である。道学以外の儒者、中には朱熹が批判してやまない人物の注も採用しているが、基本的には道学の『論語』解釈の決定版の作成が意図されている。「集注」という書名から知られるように一見資料集を装っているが、実は本書は道学の正統をもって任ずる朱熹自身の強烈な自己主張の書物なのである。本書には儒教の中に於ける道学の正統と、道学内部での朱熹の正統の二重の主張が込められているが、そのことについては論じたことがある（『道学の形成』創文社）。なお『論語集注』の基本的性格については別に一文を草する予定である。

次に「補説」の話に移りたい。伊藤仁斎の注の要約は、なるべく朱熹の注にからむところを中心に記した。荻生徂徠の注の要約も朱熹や仁斎の注に関わるところを軸にしてある。内容の要約は文章の順序通りにはしなかった。あくまでも何を言いたい注なのかかわかるように思い切つて勘所をまとめたつもりである。仁斎の『論語古義』は現代語訳があるが問題が多く、徂徠の『論語徴』にも書き下し文がありこれはこれで有益であるが、一般読者がそれだけ読んで内容を理解するのは難しいであろう。

ここでなぜ本訳注に仁斎と徂徠の注の要旨を付したかについて一言しておきたい。仁斎は朱熹を批判し抜き、徂徠は朱熹と仁斎の両者を否定しまくつた。つまり彼ら三者の注は、『論語』という経書に対してなされていること、(2)順次全面否定していく関係にあること、(3)それぞれが儒者にしては珍しいほどの思想体系を背後に所有すること、という点を共有しているのである。実際には三者は単なる否定の連鎖ではなく、仁斎は朱熹を、徂徠は朱熹と仁斎をそれぞれ叩き台にすることで自己の思想を表出しているのであるが、彼らの批判によつてまた朱熹の特質も浮かび上がってくる。もちろんこれは彼ら三人が相互に照射しあう範囲内のことであるが、思想的展開というものはそのような限定性の中でこそ起こるものであり、この件はその格好のサンプルと言えるであろう。なお三者に加えて古注を付した江戸時代の松平頼寛の『論語徴集覧』は便利な書物として知られ、三者の関係についての思想的分析は丸山真男の議論が有名であるが、筆者も筆者なりの見解を提示している（『江戸の朱子学』筑摩選書）。

実は最初は三者を並べてうまくいくのか不安があつた。批判者の批判内容が批判対象の自身とずれていることは往々にしてあり、それをいちいち断り出すと限りなく煩瑣になるからである。しかし予想以上にかかるずれは多くはなかった。それにしても仁斎と徂徠の注は魅力的である。仁斎は大幅に『論語集注』の訓詁を取り込み、それ以外は明の『論語大全』くらいし

か使っていないのだが、それでも朱子学を徹底して批判したうえで確固たる体系を作り上げている。徂徠は古文辞の鏡をまわっているものの、愉快犯とも感じられるくらいのアクロバティックな解釈で楽しませてくれながら、朱熹や仁斎の問題点を彼なりの視点で巧みに捕らえ、やはり自己の強固な体系を打ち出している。

ちなみに経学研究はとかく経書中の目立つ語句に対する諸家の注釈を比較しそれに味付けをすることが中心になりがちであり、その種の論文は大量に書かれてきた。しかし一見地味な箇所を含め経書全篇にわたって自己の解釈姿勢を貫徹できてこそ「経学」と称するに足るということを忘れてはならない。また当該経書のみならず他の経書群とも疎通させることも求められたのであって、かかる解釈の整合性に対する徹底したこだわりが経学を支え、またその持ち味になっていることをもつと認識すべきであろう。以前から仁斎や徂徠の解釈をとるところどこ紹介する形の『論語』の訳注書は出版されてきたが、これでは彼らの経学の全貌を窺わせるものにはならない。経学の醍醐味を味わう意味からも、本訳注では全篇にわたって三者を対比させる必要があつた。要するに今回の試みには、東アジア近世の経学的世界のめざましい例を具体的に示してみたいという意図もあつたのである。

本訳注を刊行してから手元に置き随時点検していると、既は何箇所か修正したい箇所が出てきた。将来全面的な改定を行う

機会が得られるであろうか。もしかなわないのであれば、せめてどなたかがより十全な全訳注を作成する際の叩き台になればと願っている。

(早稲田大学教授)